

19 世紀における家の「由緒」創出 ——武州橘樹郡長尾村山根喜十郎の場合——

椿 田 有希子

1. はじめに

(1) はじまりは、偶然の出会いから

それは、2018 年 1 月頃のことであった。私はそのころ、同年 5 月末に差し迫った歴史学研究会大会（日本近世史部会）報告¹⁾にむけて、ただひたすら天保 14 年（1843）4 月に举行された 12 代將軍徳川家慶日光社参関係の資料を捜していた。

そうした折、当時勤務していた神奈川県立公文書館の休憩時間に、いつもの如く書庫であれこれ史料を眺めていたところ、武蔵国橘樹郡長尾村山根家文書²⁾の紙焼き製本³⁾のなかに、江戸市中まで日光社参行列拝見に出向き、將軍の姿を見ることができたという記述があるのを偶然にも「発見」した。これも何かの縁であろう。すぐに、山根家文書のすべてを撮影している川崎市公文書館に問い合わせ、何点かの史料のコピーを入手した。

いったい何故私はあのとき、神奈川県立公文書館の膨大な史料の山のなかから山根家文書を手にとったのか。今となってはよく覚えていない。だがそのころ、ほんの少しの可能性にかけて、手当たり次第に片っ端から史料に目を通していただけは記憶にある。歴史学研究者ならば誰しも一度は経験するのかもしれないが、常に研究テーマのことばかり考えていると、そのうち史料のほうから使ってほしいと手招きしてくれるのかもしれない、などといささか迷信じみた思いを抱いたことは忘れられない。

結局、その年の歴史学研究会大会では、日光社参を見たとある人物の感想というコンテキストでのみ山根家文書を引用したのだが、一息ついてから再度山根家文書を読み直してみると、日光社参が行われた天保 14 年当時の山根家当主喜十郎、そして山根家という家自体が、じつに興味深い、特筆すべき性格を帯びていることに気づいた。この史料群を、日光社参の事例紹介というきわめて限定的な利用にとどめるのは、あまりにも勿体ないのではなかろうか。江戸時代人の性格と、そこにあらわれる時代的特質を読み解く有効な素材になり得ないだろうか。かくて、関東近世史研究会 2024 年 4 月月例会にて、山根喜十郎および山根家を軸に据えた報告⁴⁾を行う機会を、幸いにも与えられたというわけである。

(2) 人物の個性と歴史的特質

山根喜十郎は、歴史上では「名もなき」人である。むろん、ただたんに著名ではないだけであって、当然ながら彼ら「名もなき」人びとには、彼らなりの生き様がある。由緒書や履

歴書、日記類、書簡、さらには一見ただのメモにしか思えないような書付等々から、当時を生きた個々人のものの考え方、行動の特徴とでもいったようなものが十二分に抽出可能である、ということは、近年のエゴ・ドキュメント研究⁵⁾が明らかにしてきたとおりである。

いっぽうで人間は、社会的存在である以上、生きている（もしくは、いた）その当時の政治社会状況——いわば時代の「空気感」とでもいったもの——、そうしたもののから多かれ少なかれのがれ得ないということも、我々は先行研究を通して知っている。たとえば若尾政希が、「自己語り」を解明することは、その人が生きていた時代なり社会なりの特質を描き出すことであると定義づけ⁶⁾、また深谷克己が、江戸時代に生きた人びとを「近世人」と名づけ、彼らには身分・性別・属性などを超えた次元で、江戸時代らしい共通の性格＝集合的な人格的特徴が存在すると指摘した如くに⁷⁾。

いささか前置きが長くなった。本論の目的は、史料紹介を兼ねつつ、①山根喜十郎・山根家の「自己・自家語り」を通じて、彼、そして山根家の人格的・家としての特質を明らかにすることである。②そしてそのことを、19世紀という時代の特徴とどのように切り結べるかについて、若干の見通しを提示することである。

2. 長尾村と山根家

まずは、行論上必要な限りにおいて、長尾村⁸⁾ および山根家の概要を説明する。

長尾村は、現在の神奈川県川崎市多摩区長尾、および宮前区神木・神木本町・五所塚などを含めた地域にあたる。寛永2年(1625)時点で旗本木造・村上・大河内氏の相給であったが、明和元年(1764)⁹⁾以降は幕領となり、そのまま幕末維新に至った。

反別は、文政4年(1821)時点で本田68町7反余・新田5町9反余、百姓持林6ヶ所48町2反余。村高は、「天保郷帳」では545石余、幕末維新期の「旧高旧領取調帳」¹⁰⁾では536石余である。

次に、山根家についても確認しておこう。【図】は、山根家の系図である。一重線で囲っているのが、本論での中心人物・山根喜十郎である。波線部によると、山根氏は「藤原光長¹¹⁾後胤」山根庄司藤原俊長を遠祖とする、とある。藤原光長は平安後期から鎌倉時代の公卿(康治2年<1143>—建久6年<1195>)で、摂関家の藤原基房、ついで九条兼実の家司となった人物である。つまり山根家は公家の系譜をひいてると自認していたことが、ここから判明する。

山根喜十郎が明治初年に記した「自家語り」＝由緒・家訓書にも、彼が自らおよび山根家を長尾村においてどのような存在と位置づけていたのかが如実にあらわれている。

【史料 1】¹²⁾

山根愚老仙孫居住者、從東京南北方去王城里数五厘(里)余、玉川之南長尾里神木谷¹³⁾住居、山根数十代農事相勤小祿之暮来候時、徳川家將軍職 天朝エ被為成御返上如何御

事候、手下賤不有所知、雖然 朝敵之被為有汚名駿遠三之三ヶ国御拝領東都御開、即天朝之御代相成、①村方戸幅人選之上愚老幅長相勤罷在候处、愚老七十八才相成万事難行届、嫡男喜三郎事万延元年申十月二日相卒、孫新三郎江先祖親々ヨリ譲り受ル所之田畑山林家財等、②當時持高村内二十七石四斗貳升七合七勺、他村之持高平村・上萱生・登戸三ヶ村持高九石一斗四升四合三勺、外馬絹村持地八反八畝、土橋村林壺町七反貳畝十六歩、凡筆数合百七十八筆、愚老居屋鋪続田畑山林松杉雜木畑植附置桑数百株也、前書之田畑山林家財並書籍等迄讓受、子孫代々者主君如日月父母、愚老者実如天地難有恩義必々日夜勿忘、從祖先数代農事稼穡之勤勞之恩德常々不可忘、敬謹而女色大酒惰弱驕慢(大損)必勿成、家名退轉之基也、誠可恐可慎事也、舜者大知(大損)□好問好□言揚善隱惡而執其兩端、用其中於民大知之人者如愚、世諺曰有能鷹者隱爪云

傍線部①からは、山根喜十郎が長尾村の「幅長」（村役人のことか）を長年つとめていること、傍線部②からは、明治初年段階で山根家が高約 40 石を所持（うち長尾村内に 27 石 4 斗余、ほか近隣の高平村・萱生村・登戸村・馬絹村・土橋村などにも土地を所持）していたことが判明する。このように山根家が以前からそれなりの高を有しており、長尾村においても村役人をつとめる器量がある家柄なのだということを子孫に伝えようとしているのである。別の記録によれば、山根家は天保飢饉の際にも他の村役人ら計 7 名とともに窮民らに米金の施しを実施し、その功績で幕府から金 200 疋を褒美として与えられたという¹⁴⁾。このことから、山根家の経済的余裕と、村のリーダーたろうとする自負が垣間見えるだろう。

山根家の当主（おそらくは喜十郎か）が記した「長尾村古性名家数」¹⁵⁾でも、井田太郎左衛門（70 石余）、井田勘左衛門（「大高持」）、永井助左衛門（「同断」）について 4 番目に「同断 四十石余 山根新左衛門」を挙げていることから、山根家の旧家意識がいかに強いものであったかを推測することは十二分に可能であろう¹⁶⁾。

にもかかわらず、山根家には残念ながら、そのことを証明する旧記のたぐいが何一つ残されていない。それは、享保年間（1716-36）に家が焼失し旧記を紛失してしまったからだという。「藤原光長より後 往古之事ハ観音堂ニ有之儘写ス、当家享保年中焼失致、諸書物紛失致、古代之事聞書之儘相印候事」¹⁷⁾、つまりは、享保年間より以前のことは「観音堂」（神木堂¹⁸⁾）にかろうじて保管されていたわずかな記録からしか知り得ないというのである。それゆえであろうか、化政期に幕府が編纂した『新編武蔵風土記稿』¹⁹⁾には、長尾村の旧家として井田（高橋）太郎兵衛、そして前出「長尾村古性名家数」では山根家よりはるかに後列に挙げられていた鈴木家（両家ともに小田原北条氏に仕えていた由緒を有する）について詳しく記されるいっぽうで、山根家については全く触れられていないのである。

おそらくこれら諸々が相俟った結果、山根家の旧家意識がいたく刺激され、ひいては山根家も本来ならば長尾村の旧家として挙げられるべきであるのに（しかるに現状は…）、という鬱屈とした思いを募らせるに至ったことは、想像にかたくない。それゆえ山根家および喜

十郎は、家の「箔付け」＝「由緒」の創出をひたすら希求することになるのだが、それについては次章以下で詳しくみていきたい。

3. 山根喜十郎による「由緒」の創出

(1) 喜十郎の学問遍歴

山根喜十郎正誠は寛政8年(1796)、長尾村に生まれた。没年は不詳であるが、残存する史料から推測するに、明治の早い段階で亡くなったようである²⁰⁾。

彼は、幼少の折から近在で手習いを開始している。「年中紀数簿」²¹⁾によれば、享和3年(1803)、隣村の平村・山田弥十郎方に入門したというから、当時の在村における学びの過程としては、ごくごく標準的なスタートといえようか。

しかしそれでは彼の知的好奇心が飽き足らなかったのか、あるいは山根家という家自体に好学の気風があったのか。それ自体は定かではないが、その後長きにおいてさまざまな研鑽を積むことになる。

文化8年(1811)11月から喜十郎は江戸愛宕下の上野国伊勢崎藩邸において岡安碩から医学を、浦野市左から手跡を、浦野仁左衛門から読物を習い、さらに伊勢崎藩江戸藩邸の学問所である信古堂でも一年余り学んだのち、同13年(1816)の春に長尾村へと戻り、平村弥十郎の弟惣五郎のもとで読物を学んだ。その後、江戸備前町愛宕下久保町の井田定七郎方へ入門して儒学を、青山甲賀組和田佐仲から易学を学んでいる(どちらも文政初年頃のことと思われる)。さらに文政3年(1820)の秋からは隣村である上作延村の三田伊右衛門(儒学者亀田鵬斎の門人であり、井田定七郎の師でもあった)方に入門し、さらに学問を続けた。加えて、時期は不詳であるが世田谷豪徳寺の悦成禅師のもとに継続して参禅していることも確認できる。こうした学問形成を経て、天保初年(1830-)頃、父である山根新左衛門から家督を継いだようである²²⁾。

以上の経歴からみえてくるのは、長年にわたる学問・人格の研鑽を可能にした経済的余裕もさることながら、山根喜十郎という人物の、学問を通じた「自己を律する」ことへの執心(参禅という行為からもうかがい知ることができるだろう)、そして強烈な上昇志向である。かかる山根家の気風、喜十郎の人格的特徴は、前章の末尾で触れた山根家の「箔付け」行動といかに結びつくのだろうか。次節において、具体的な事例から読み解いていこう。

(2) 「伝統」の模倣と「由緒」の創出

【表】は、山根家の家記類から、治者との関わりについて記された箇所を抽出したものである。以下、時系列に従い、①小田原藩大久保家、②徳川将軍家に分けて説明する。

①小田原藩大久保家

最初に山根家が「箔付け」に利用したのは、小田原藩大久保家である。とはいえ、直接的

に關係を有したわけでは、むろんない。以下の史料にみられるごとき、少々かわった方法によってである（【表】No.1）。

【史料 2】²³⁾

聞書之事

一正月七日の朝家ねむ根江水を打置時ハ、火ぶせに相成り候事

御老中様大久保加賀守様御屋敷ニ而年々正月七日の朝如斯例被遊候由承り候間、今歳より初めて水をうち置事を致なり

文政七甲申年

正月七日辛未 山根氏

山根家では、毎年正月7日の朝に火除けのまじないとして屋根に水を打っているが、それは大久保加賀守（相模國小田原藩主・大久保忠真）の屋敷で毎年正月7日の朝に行われていることを耳にして、文政7年（1824）から始めた行事だという。要するに、小田原藩の儀礼をそっくりそのまま模倣して家の「伝統」を創出したというわけである。この「伝統」については天保9年（1838）「村年中記帳」²⁴⁾にも類似の記載があることから、天保年間の半ば頃までには定例化していたものと思われる。

ここで疑問なのだが、大久保家の儀礼の情報がどのようなルートをとって山根家に伝わったのだろうか。そもそも山根家は、いかにして大名家とのコネクションを築いたのだろうか。この点については、のちに喜十郎が大久保家の分家宇津家を経由した徳川將軍家とのつながりを模索していることから（後掲【史料3】、【表】No.3）、喜十郎（もしくは彼の父、新左衛門もか）が学問によって培ったネットワークを最大限に活用したのではないかと考えておきたい。

ではいったいなぜ、山根家は儀礼の模倣という、いささか風変わりな手法をとってまで、小田原藩大久保家に接近する必要があったのか。背景として考えられるのは、村内の他の旧家が小田原北条氏旧臣という由緒を有しているのに対して、山根家はそうではない、よしんばそうだったとしても、それを証拠立てる旧記を失ってしまっている、ということである。もちろん小田原北条氏は既に滅亡しているため、北条氏とのつながりを遡及して得ることはできない。そのかわりとして山根家を選んだのが小田原藩大久保家だったのであり、そうして村内旧家との比肩を図ったのではないかと推測する。

付言すれば、山根家の旧記のなかには、村内の旧家（高橋家＝井田家）に宛てた小田原北条氏の虎印判状らしきものの写もみられる²⁵⁾。いつごろ、誰によって写されたのかは判然としないが、少なくとも山根家が小田原北条氏になみなみならぬ憧憬の念を抱いていたことは指摘できるだろう。

②徳川将軍家

小田原藩とのつながりを、きわめて間接的にであるにせよ獲得した山根家は、次のステップとして徳川将軍家とのつながりを模索しはじめる。まずは天保8年(1837)、喜十郎は、将軍の代替わりに際して町入能が実施された際に近在からも拝見に赴いたことを記している(【表】No.2)。ただしこの際、喜十郎が拝見したか否かは定かではないが、わざわざ家の記録に記すという行為自体に、徳川将軍家へのなみなみならぬ関心を見てとることができるだろう。

彼の関心がより具体的な形となってあらわれるのは、天保末年である。天保13年(1842)11月、喜十郎は、のちに12代将軍となる世嗣時代の徳川家慶が文政5年(1822)、内大臣に昇任した際、江戸城内の紅葉山東照宮参詣のために用いたとされる「御金剛」を入手している(【表】No.3)。

【史料3】²⁶⁾

覚

文政五午年三月七日御転任御任槐²⁷⁾二付、内府様紅葉山御宮江御参詣之節御用立御金剛

御老中

大久保加賀守様(引用者注・相模國小田原藩主大久保忠真)

御分家

宇津半之助様

御家中

尾口幸三郎様より

天保十三年十一月、右之御金剛頂戴申候

喜三郎

ふさ

右幸三郎様者半之助様御縁之御人也

「御金剛」とは、おそらくは祈祷に用いる加持土砂の類であろうか。ともあれ、これを小田原藩大久保家の分家である宇津家の、さらに家臣である尾口幸三郎という人物から入手したというから、どんなに僅かな伝手をたどってでも徳川家との「つながり」を獲得したいという喜三郎の執念のほどがうかがい知られる。

彼の熱意はこれにとどまらない。翌天保14年(1843)2月には、家慶が節分の豆まきの際に口をつけたという「御かわらけ」を、紀州徳川家分家である伊予西条藩の家臣から入手している(【表】No.4)。

【史料 4】²⁸⁾

一御かわらけ

壱ツ

右者天保十四年御豆まき之節 將軍様御口ニ御附被遊候御かわらけ、松平左京太夫様
(引用者注・伊予国西条藩) 御家中高橋三五郎様ハ天保十四年卯二月中相戴申候

喜十郎

これらは、いかにも怪しげで出所不明なものに感じられるかもしれない。しかし、少なくとも喜十郎と山根家にとっては決してそうではなかった。將軍が用いた・口をつけたとされた時点で特別な存在に昇華しているのであるから。享保年間に旧記を失った山根家に箔をつけ、新たな「由緒」を創出する目的で手に入れたに相違なかろう。ここでひとつ疑問なのが、いち村人にすぎない喜十郎がなぜ大名家の家臣とのコネクションを有していたのか、である。このことに関して具体的には明らかにし得ないが、さきにも述べたように、学問を通じたネットワークを最大限に活用したものと思われる。

このように考えてくると、本論の冒頭で述べた喜十郎の日光社参行列拝見（【表】No.5）も、喜十郎による山根家の「箔付け」という文脈で読み解くことができるのではないか。

【史料 5】²⁹⁾

天保十四年卯四月十三日夜御発駕有之、日光御社参、十七日御祭り、廿一日御帰り、十三日江戸湯島にて奉拝候人十三日五ツ時頃御通り被遊候、四月廿日王子村松屋と申茶屋江伊藤殿と同道いたし旅宿いたし、廿一日昼八つ時將軍様御通り奉拝候、倅喜三郎ハ江戸湯島六丁目川越屋と申湯屋にて鈴木権六殿・喜三郎兩人昼七ツ頃 將軍様御通り奉拝、倅喜三郎湯島川越屋二夜泊り、王子村松屋二夜泊り喜十郎・伊兵衛殿、
將軍様御面相いかにも御明将之様子奉拝、御歳御五十歳位、御色黒御顔長、御ひた
い広御形、中ぜ(背)ひ之様子奉拝

卯四月廿一日

喜十郎

喜十郎は、幸い將軍を目の当たりにすることができ、そしてその感動を「いかにも御明将」という最大限の賛辞であらわしている（傍線部）。この史料によると、倅喜三郎も喜十郎とは別行動ながらも行列拝見に赴き、喜十郎と同様に將軍の通行を目にしたという。

このときは特段、將軍にまつわる具体的なモノを手に入れたわけではない。しかしながら、日光社参の行列をわざわざ拝見しに出向き、しかも將軍の姿かたちをつぶさに描写できるほどに間近に接し得た、まさにそのことこそが山根家による新たな「由緒」創出を担保するものと期待したからこそ、このような記録を残したのであろう。

4. おわりに

本論を締めくくるにあたり、「はじめに」で挙げた目的①・②にそくして論点を整理しておきたい。

まずは①であるが、前提として念頭におかねばならないのは、そもそもあらゆる「伝統」や「由緒」というものは、歴史上のある時点で、何らかの必要に迫られて創出され（ときには捏造され）、あたかも昔からそうであったかのように語られることである³⁰⁾。とはいえ、そうした伝統や由緒とされるものは、まったくの無から生み出されることは稀である。家に伝わる旧記や口承の類を、その時代ごとの権威や「古き良き過去」の想起と結びつけつつ、自己・自家の優位性を再確認・再強化する作業であるといえよう。

とするならば、本論で検討した山根家、および山根喜十郎の「由緒」創出＝「箔付け」行為の特筆すべき点は、いったいどこにあるのだろうか。このことを考えるうえで重要なのが、山根家は家の由緒を物語る旧記の類を近世中期に失ってしまった、ということである。しかも村内の他の旧家が小田原北条氏家臣という、相模国内では極めて有効な「切り札」ともいべき由緒を有し、なかには『新編武蔵風土記稿』にもその旨が記載されるという榮譽に浴している＝いわば幕府の「お墨付き」を得ているのとは異なり、山根家はそうした由緒を主張すること自体が不可能であった（公家の家臣の末裔では、由緒としてはいささか弱すぎる）。

そこで編み出されたのが、自家の「箔付け」のために小田原藩の年中行事を模倣し、さらには徳川将軍にまつわるモノを苦心して入手するという、本論で明らかにした如き手法であった。こうした行為は現代人の我々からすれば荒唐無稽に思われるかもしれないが、山根喜十郎という突出したパーソナリティと山根家の満たされぬ旧家意識が結びついた結果が、こうした手当たり次第の権威への接近と取り込みだったのである。

次に、②についても現段階での見通しを示しておきたい。19世紀の地域社会では、古いもの、家や地域に関する歴史的遺跡や遺物への関心が広まり、歴史意識が活性化されたことは、羽賀祥二が指摘するとおりである³¹⁾。なかでもとくに徳川家康（東照大権現）に関しては、彼と自家・地域との由緒を再発見・再確認する動きが相模国では盛んであった³²⁾。

本論で検討した山根喜十郎による家の「箔付け」行動も、広義にはその一環と言えるかもしれない。ただし、ほぼ無の状態から家の「由緒」を作りだそうとしていること、そしてその方法が年中行事の模倣であったり³³⁾、自家とは直接関係のない「遺物」（になりうる可能性のあるモノ）を手に入れたりという点に関して、特徴的である。また、より頼む由緒の源泉＝権威として、ときには小田原藩大久保家、またあるときは徳川將軍家といったように都合良く「利用」するさまは、ややもすれば節操がないようにもうつる。だが、喜十郎にとってみれば、どの権威に依拠するかは、時勢に応じていかようにも変化しうるものであったらしい。

幕末の安政期になると喜十郎は、延享3年(1746)6月の大雷時に「禁裏様より御祈祷有

之」御守として、村内の寺院に天皇御製の和歌が下賜されたという故事を掘り起こす³⁴⁾。この「御製の和歌」下賜云々は長尾村全体にとっての由緒であり、直接山根家に関わる話ではないのだが、それを家の記録に書き記すという行為の背景に見え隠れするのは、小田原藩や徳川將軍家にとどまらず、ありとあらゆる権威に対する貪欲な好奇心である。そして明治維新後には、新政府への接近を急速に強めている。「自家語り」(前掲【史料 1】)を大政奉還と「天朝之御代」の到来から始めていること自体、そして明治 2 年(1869)に喜十郎の母が 96 歳で知県事役所から褒賞されたことをうけて「餅をつき、近所・諸親類江祝餅相遣し、近所・親類共相招祝ひ申候」³⁵⁾と誇らしげに記す(【表】No.6)、そのこと自体に、その時々々の権威に対する順応性の高さ、「強かさ」を見ることができよう。

註

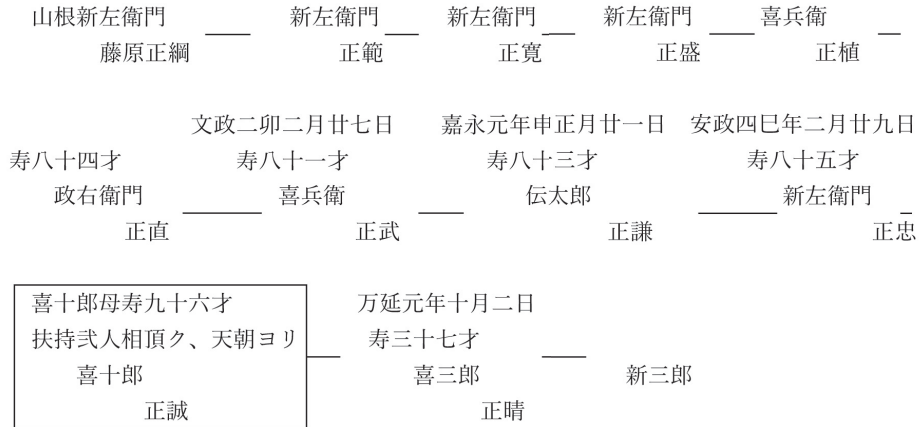
- 1) 椿田有希子「19 世紀における將軍権威の再構築と地域・民衆」(2018 年度歴史学研究会大会・日本近世史部会、於早稲田大学、2018 年 5 月)。報告要旨は『歴史学研究』976 号、2018 年 10 月に掲載。
- 2) 川崎市市民ミュージアム蔵。川崎市公文書館に、市史編纂時に撮影された写真製本あり。
- 3) 神奈川県立公文書館には、昭和 40-60 年代にかけて実施された、神奈川県史編纂にともなう県内古文書悉皆調査の成果として、旧家に保管されていた古文書の一部を写真撮影し、さらにその一部を抄録・写真製本したものが収蔵されている。
- 4) 椿田有希子「武州橘樹郡長尾村山根喜十郎がみた 19 世紀」(関東近世史研究会月例会、於立正大学、2024 年 4 月)。
- 5) 長谷川貴彦「エゴ・ドキュメント研究の射程」(同編『エゴ・ドキュメントの歴史学』岩波書店、2020 年、序章)、ほか。
- 6) 若尾政希「日本近世における自己語りの諸相―「我」と天道の間で」(長谷川貴彦編『エゴ・ドキュメントの歴史学』岩波書店、2020 年、第 3 章)。
- 7) 深谷克己『近世人の研究』(名著刊行会、2003 年)。
- 8) 『日本歴史地名大系 14 神奈川県地名』(平凡社、1984 年)長尾村の項。
- 9) ただし『新編武蔵風土記稿』では元禄 3 年(1690) or 同 11 年(1698)に幕領になったとある。(蘆田伊人編集校訂『大日本地誌大系 9 新編武蔵風土記稿 第三巻』雄山閣、1996 年)。
- 10) 国立歴史民俗博物館ホームページ 旧高田領取調帳データベースより。
https://www.rekihaku.ac.jp/up/cgi/login.pl?p=param/kyud/db_param
- 11) 平安後期―鎌倉時代の公卿。康治 2 年(1143)～建久 6 年(1195)。藤原光房の子。摂関家の藤原基房、ついで九条兼実の家司となる。文治 2 年(1186)参議兼右大弁、のち正三位。九条三位と称される(上田正昭ほか監修『日本人名大辞典』講談社、2001 年)。
- 12) 年不詳「(山根家由来書)」(川崎市市民ミュージアム蔵山根家文書 川崎市公文書館写真製本 60-14-5)。内容から、明治初年に記されたものと思われる。
- 13) 神木谷戸(シボクヤト)のことか。長尾村の小名。(日本地名研究所編『川崎地名辞典(下)』川崎市、2004 年、69 頁)
- 14) 元禄 4 年(1691)正月～明治初年「年中紀数簿」(川崎市市民ミュージアム蔵山根家文書 川崎市公文書館写真製本 60-14-5)。

- 15) 注 14 史料。
- 16) 明治期の自由民権運動の際、山根喜平（山根喜十郎の孫と推測される）が井田氏や鈴木藤助といった長尾村の旧家とともに活動している（金子千滋氏のご教示による）。このことから、山根氏が地域において重要な位置を占めていたであろうことは、十二分に推測可能である。
- 17) 注 14 史料。
- 18) 神木堂（シボクドー）は、山根本家の観音堂であり、注 13「神木谷戸」の地名の元となっている（注 12 前掲『川崎地名辞典（下）』74 頁）。
- 19) 注 9 書。
- 20) 寛政 8 年 (1796) 8 月 13 日生。没年は不詳だが、明治初年までは存命していることを確認できる（注 14 史料）。
- 21) 注 14 史料。以下、本節で明らかにする学問遍歴の典拠は、同資料による。
- 22) 山根家の年中行事を記した、天保 9 年 (1838)「村年中記帳」（川崎市市民ミュージアム蔵山根家文書 川崎市公文書館写真製本 60-14-7）に、「父新左衛門代ニハ…」との記載がある。このことと喜十郎の年齢とを勘案し、天保初年頃に家督を継いだと推測した。
- 23) 注 14 史料。
- 24) 注 22 史料。
- 25) 安政 3 年 (1856) 8 月「万年諸事吉凶日録」（川崎市市民ミュージアム蔵山根家文書 川崎市公文書館写真製本 60-14-6）。
- 26) 注 22 史料。
- 27) 任槐（にんかい）…太政大臣、左大臣、右大臣のいずれかの大任に任ずること（日本大辞典刊行会編『日本国語大辞典 第 8 巻』小学館、1980 年）。
- 28) 注 22 史料。
- 29) 注 22 史料。『川崎市史 資料編 2 近世』（川崎市、1989 年）227-233 頁に活字版（抄録）が掲載されている。
- 30) エリック・ホブスボウム、テレンス・レンジャー編『創られた伝統』（紀伊國屋書店、1992 年）、など。
- 31) 羽賀祥二『史蹟論 19 世紀日本の地域社会と歴史意識』（名古屋大学出版会、1998 年）。
- 32) 井上攻『由緒書と近世の村社会』（大河書房、2003 年）、中野光浩『諸国東照宮の史的研究』（名著刊行会、2008 年）、斉藤司『福原高峰と「相中留恩記略」—近世民間地誌にみる「国」意識—』（岩田書院、2018 年）、『春期特別展 ひらつかの家康伝説—由緒と地域—』（平塚市博物館、2016 年）、ほか。
- 33) そもそも公家、武家の年中行事が一般庶民にまで広がるのは、近世後期のことと考えられる。その意味においても、本論で検討した年中行事の模倣は、すぐれて 19 世紀的な事象といえよう。
- 34) 注 22 史料。
- 35) 元治元年 (1864) 正月～「年内祝儀不祝儀控帳」（川崎市市民ミュージアム蔵山根家文書 川崎市公文書館写真製本 60-14-10）。

【図】山根家系図

元禄4年正月～明治初年「年中紀数簿」（川崎市市民ミュージアム蔵山根家文書 川崎市公文書館写真製本60-14-5）および年不詳「（山根家由来書）」（川崎市市民ミュージアム蔵山根家文書 川崎市公文書館写真製本60-14-5）より作成

藤原光長後胤 山根庄司藤原俊長
先祖新左衛門丞正宣、代々孫光賛 正顕 正道



【表】山根家と治者とのかわり

No.	年月日	事項
1	文政7年(1824)正月	老中大久保加賀守（相模国小田原藩）屋敷では毎年正月7日の朝に火除けのまじないとして屋根へ水を打つと聞いたので、今年から山根家でも同じように行うこととする
2	天保8年(1837)9月5日	將軍代替わりに際し御能拝見を江戸町中に仰せつけられ、近在からも拝見に赴く
3	天保13年(1842)11月	「文政五午年三月七日御転任御任槐二付内府様（徳川家慶）紅葉山御宮江御参詣之節御用立御金剛」を、老中大久保加賀守分家宇津半之助家中尾口幸三郎から、喜三郎（喜十郎嫡男）とふさが頂戴
4	天保14年(1843)2月	天保14年の「御豆まき」の際、「將軍様御口ニ御附被遊候御かわらけ」を、松平左京太夫（注・伊予国西条藩〈紀州徳川家分家〉）家中高橋三五郎から喜十郎が頂戴
5	天保14年(1843)4月	喜十郎・喜三郎、江戸にて日光社参行列拝見
6	明治2年(1869)2月21日	喜十郎の老母（96歳）が知県事役所から式人扶持を下されたので、近所・親類を招き祝宴開催・祝い餅配布

〈典拠〉

元禄4年正月～「年中紀数簿」（川崎市市民ミュージアム蔵山根家文書 川崎市公文書館写真製本60-14-5）、天保9年9月～「村年中記帳」（川崎市市民ミュージアム蔵山根家文書 川崎市公文書館写真製本60-14-7）、元治元年正月～「祝儀不祝儀等控帳」（川崎市市民ミュージアム蔵山根家文書 川崎市公文書館写真製本60-14-10）